

地域の皆さんや家族など、
大勢の人に支えられた結果で
自分がもらった章だとは思えません



工藤 嘉夫 さん

●くどう・よしお 昭和32年に県立六原経営伝習農場を卒業後、水田2畝、畑2畝、乳牛2頭、馬1頭で農業を始める。妻のミツエさんと二人三脚で農業を經營するかたわら、岩手県農業農村指導士や岩手県農政審議会委員などを歴任し、県内外で講演活動を通じた家族経営協定の普及などに尽力。座右の銘は「晴耕雨読」、好きな言葉は「努力」という67歳。血液型O型のうお座。両親と妻、息子夫婦、孫2人の8人家族。田頭在住。



18

歳で農業を始めた年から現在に至るまで、約50年にもわたって営農計画や作業日誌を書き記してきた、ずしりと重い無数のノート。そこには、工藤さんが農業者としてこれまで歩んできた人生が凝縮された宝物が詰まっている。

記録を付けることで計画的に農業を行いやすくなり、經營が円滑になるという考え方は、今でこそ珍しいものではないが、当時としては先進的なものだ。牛を増やすなど經營規模を拡大していくことと同時に、草地を地域の酪農家で共同利用するなど負担を軽減して、自立した農業經營の確立に力を注いできた。こうした工藤さんの優れた經營感覚と地域でのリーダーシップが高く評価され、社団法人大日本農会の19年度緑白綬有功章受賞につながった。

工藤さんは「地域の皆さんや家族の協力、大勢の人に支えられた結果で、自分がもらった表彰だとは思えませんよ」と謙虚に語る。

農業で最も大切なことは何かという問いに対して「あきらめず、努力し続けること」と工藤さんは答える。農業は、どんな作物でも必ず特徴があり、それを生かすために工夫し、努力することを重視する。

農業経験が50年になろうという工藤さんだが、未だに自分分は1年生だと考えているのだという。「農業は毎年条件が変わるもの。去年までの正解が今年も正解になるとは限らない」と語り、気を引き締め、より良い農産物を生産するという大きな目標へ向けた努力と探究に終わりは無い。

常日ごろからの努力を惜しまない工藤さんだが、後進の育成にも気を配る。「先輩や専門家の話を聞くことが何より大切です。それぞれが経験し、勉強してきたことに耳を傾けることは必ず役立ちます」と言いつて聞かせるという。表彰を機に、地域や農業のためにさらなる貢献をしようと思いを燃やす。工藤さんの思いは、遠からず大きな実を結ぶことだろう。